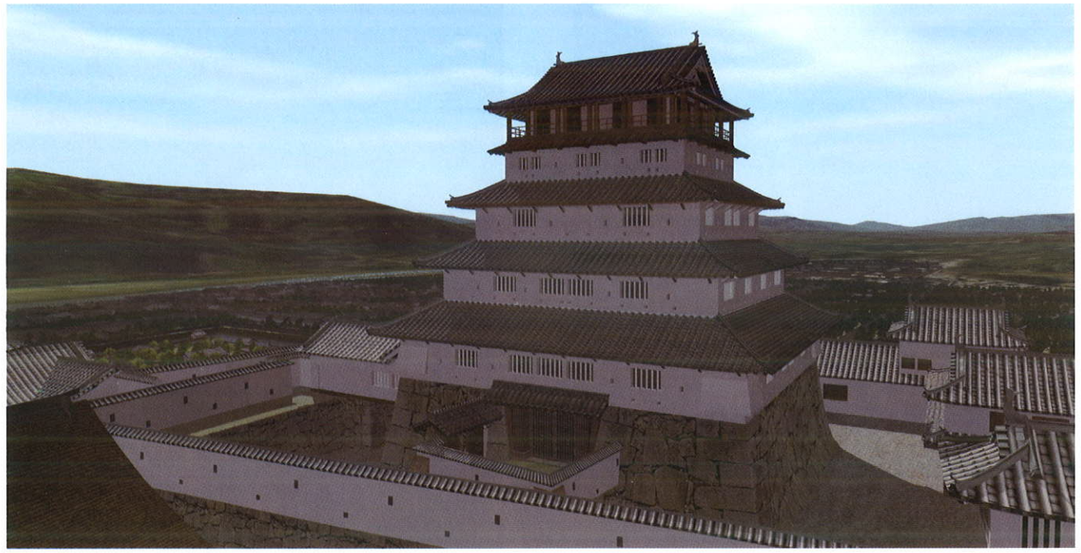
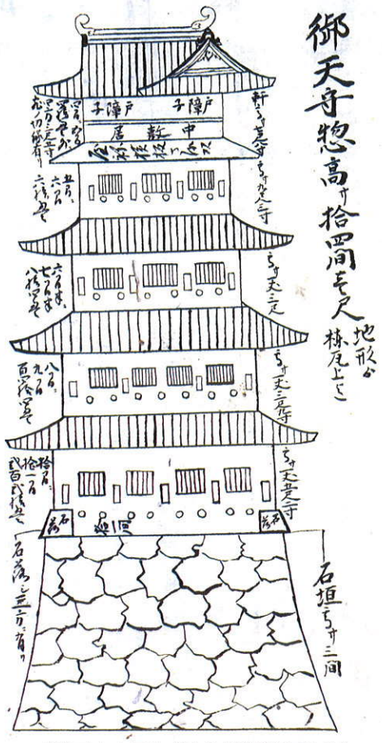


津山城ＣＧ（北東方向からみた天守）

津　山　城　の　天　守

天守曲輪の中心に位置する天守はどのような物だったのでしょうか。

津山城の天守については、絵図・文献の様々な資料が残っていますが、その内の一つをここで紹介します。



「御天守之図」（津山城資料編より）

左の図がそれで、中ページで紹介した「御天守曲輪之図」と同様、『作州津山御城内之記』に挿図として描かれた「御天守之図」です。元禄十年（1697）頃の天守を実際に見て描かれたもので、資料的価値の高いものです。天守各層の広さと高さが記され、外面の窓や狭間・石落しの様子などが具体的に記されています。

この資料から、津山城天守の特徴として、①五層の天守である②最上層の入母屋屋根を除いて破風が存在しない③各階に矢狭間や鉄砲狭間が数多く設けられている④四層目の屋根が板葺きである等の特徴が認められます。これらの特徴を実際の天守台石垣の高さに合わせて再現したのが、上のコンピュータ・グラフィックスの画像です。一般には小倉城を手本にしたと言われており、古い絵図などをみると確かによく似ています。

外面に装飾的な付加物がほとんど認められず、逆に狭間などの攻撃施設を数多く備えている所など、実用本位で質実剛健な所は築城した森忠政の気質を示しているようです。

津山城だより No.11 2007年3月
TSUYAMAJODAYORI

発行年月日　平成19年3月31日
編集・発行　津山市教育委員会
津山城整備推進係
〒708-0824岡山県津山市沼600-1
TEL　(0868)24-8413
印　　刷　(有)中央印刷

津山城だより
TSUYAMAJODAYORI
No.11
2007年3月
津山市教育委員会
津山城整備推進係

天守曲輪の整備に取り組んでいます

平成18年度事業は、これまで平成13年度～平成17年度までの備中櫓復元整備工事を中心とした整備から、備中櫓以外の本丸全体を視野に入れた整備事業へと、その方向を大きく変更して実施しました。

本年度はその手始めとしてまず、本丸西端の「天守曲輪（後述）」の西半部の整備を実施しました。

今後の整備事業は、備中櫓や五番門南石垣土塀などのような復元的な整備事業ではなく、主に平面的な表示を中心とした整備になっていきます。

また、今後数年間は次頁で詳しく解説している「天守曲輪」の整備を行う予定であり、今回の「津山城だより」では、この天守曲輪について少し詳しく考えてみることにします。

（写真左上は一階御座之間の床と違い棚の現在の様子。左下は一階西側屋根の様子。右上は一階西面破風の懸魚。右下は二階北西隅に設けられている上段之間の現在の様子。）

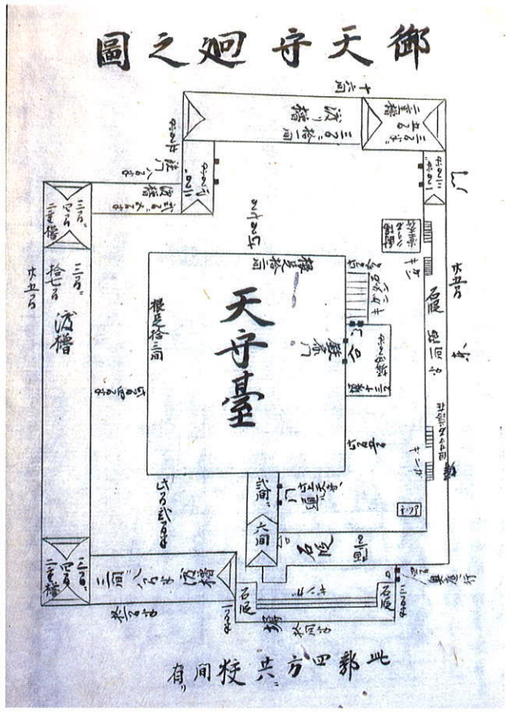
天守曲輪について

1．縄張りからみた位置づけ

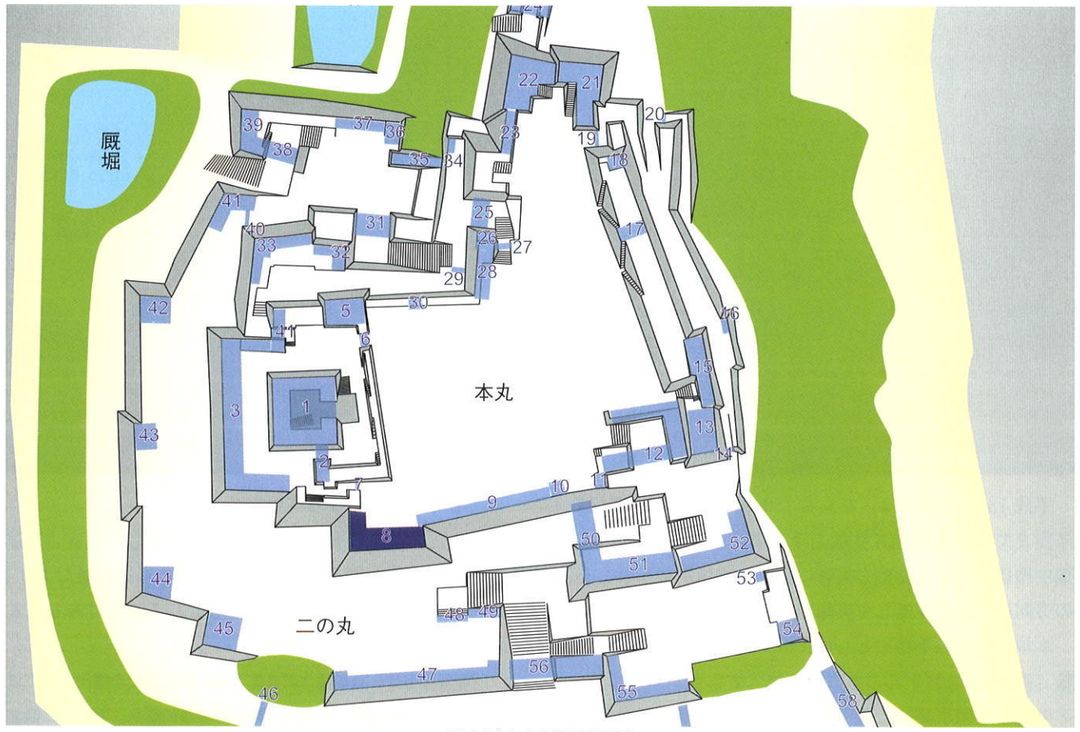
津山城本丸は、「鶴山」の山頂を平らに整形して作られています。本来本丸は御殿などを建てる都合上、なるべく四角いほうが都合がよいのですが、津山城の場合は本来の山の地形の制約上からか、本丸が逆「L」字状を呈しています（下図参照）。

この逆「L」字の本丸の西の端に、高さ４ｍ程度の石垣で区画された部分があります。本丸御殿が建てられている部分とは南側は五番門（下図７）、北側は八番門（同６）で仕切られており、北側の一段低い腰曲輪とは七番門（同41）で仕切られています。この区画の中心部には、津山城のシンボルである天守（同１）が存在しています。

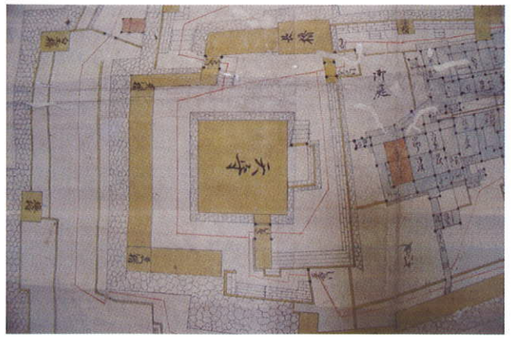
つまり本丸の西端に、天守を中心とした独立性の高い曲輪が存在しているのであり、この部分を「天守曲輪」と呼んでいます。ちなみに本丸御殿側との仕切石垣上には塀が設置されており、その塀には狭間や石落しが備えられていたこともわかっており、例え敵が本丸まで攻めてきても、天守を中心に最後までこの天守曲輪で籠城することが想定されていたことがわかります。



御天守廻之図（津山城資料編より）



津山城本丸周辺平面図


津山城絵図（天守曲輪部分・津山城資料編より）

2．「御天守廻之図」に記された天守曲輪

ところで左ページ上の図は、「御天守曲輪之図」と呼ばれる一枚の絵図です。これは本来単独の絵図ではなく、『作州津山御城内之記』に挿図として描かれたものです。描かれた時期は元禄十年（1697）頃とされ、寸法などが丁寧に記入されています。

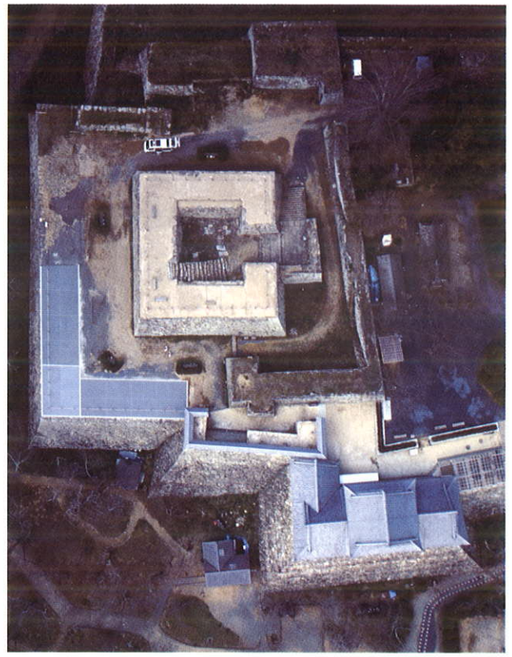
この絵図に描かれている範囲が、すなわち天守曲輪の範囲となります。この絵図の描かれ方から見ても、少なくとも元禄頃には天守曲輪が独立した曲輪として認識されていたことが理解できます。

ちなみにこの絵図は一見模式的に描かれていますが、記入された寸法を現地で実際に測ってみると、現在の石垣の状況に非常に合致しています。恐らくこの絵図に記入された寸法は実測であり、元禄期という現存する津山城の絵図としては比較的古い時代の物であるということも勘案すれば、津山城の古い時期の実態を知ることのできる貴重な絵図なのです。

3．今年度に整備を行った箇所

「御天守廻之図」を見ると、「天守臺（台）」と記された部分の南西側・西側・北西側を囲むように「渡櫓」が存在していることがわかります。絵図からはこの部分が平屋の細長い「多門櫓」と呼ばれる櫓で、北西と南西の角部分が櫓になっていたことが読み取れます。

発掘調査により現れた多門櫓部分の栗石


上空から見た天守曲輪

さらに絵図からはその寸法が読み取れ、南面の多門櫓は長さ八間半、幅が三間、北西角および南西角の二重櫓は三間×四間、西面多門櫓は長さ十七間、幅三間、北面多門櫓は長さ五間半、幅が二間となっています。

ちなみに下の写真は多門櫓の南西角部分の発掘調査状況を天守台から見たところです。石垣内部に夥しい量の裏込めの栗石が入れられていることが見て取れます。この栗石は石垣の表面から奥行約６ｍの範囲に入れられていました。津山城における一間は約197㎝ですので、栗石の範囲はおおよそ三間に達しており、天守曲輪の多門櫓はほぼ栗石が充填されている範囲の中に建てられていることが判明しています。

話を今年度の整備事業に戻しますと、今年度は南面多門櫓および南西角二重櫓、そして西面多門櫓の南半分までを樹脂系の舗装で表示しました。これは昨年度に長局および到来櫓部分の範囲表示に用いた手法と同じ手法です。

今後数年間かけて、この天守曲輪一帯の整備を行う予定です。